

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23591732

研究課題名(和文) 成人期注意欠如・多動性障害の半構造化面接ならびにスクリーニング日本語版の作成

研究課題名(英文) Developing semi-structured diagnostic interview and screening questionnaire for adult ADHD

研究代表者

武田 俊信 (TAKEDA, TOSHINOBU)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：70596460

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：内外の成人期のADHDに関して研究機関の訪問や学会への参加を通して情報を得た。また精神神経学会に於いてシンポジウム『成人期のADHDにおける診断および治療上の課題』を企画した。ADHDをもつ成人から日常生活上の困難さや症状についての情報を収集して半構造化面接のプロトタイプを作成し、予備調査を経て本調査を施行した。同時にASRSというスクリーニングのデータを収集した。その予備的な成果を児童青年期精神医学会などで発表している。現在、DSM-5にも対応した成人期のADHDの半構造化面接の論文作成が終了し投稿準備中である。同時に成人期のADHDの単語記憶検査の特徴について神経心理学会で発表している。

研究成果の概要(英文)：Firstly, information was gathered through visiting facilities in Japan and abroad which is specialized in adult ADHD. At the conference of the Japanese society of psychiatry and neurology, the symposium "The diagnostic and therapeutic issue on adult ADHD" was organized by the main researcher. Collecting the data about difficulties or symptoms in daily life from adults with ADHD, semi-structured diagnostic interview for adult ADHD was tentatively made, administered to several adults, and then to adults with ADHD. At the same time, the ASRS which is screening questionnaire for adult ADHD was administered to adults with both typical development and ADHD. Preliminary results on semi-structured interview for adult ADHD, ASRS, and characteristics of word learning test in adult ADHD were presented at the professional meetings. Currently, the paper on semi-structured diagnostic interview and screening questionnaire for adult ADHD is going to be submitted.

研究分野：内科系臨床医学

科研費の分科・細目：精神神経科学

キーワード：注意欠陥多動性障害 成人期 ADHD スクリーニング 半構造化面接 発達障害 診断

1. 研究開始当初の背景

成人期 ADHD の有病率は米国では約 4.4%にもなるとされ (Kessler et al., 2006)、各国でも大まかな一致をみている。本邦での児童期および成人期 ADHD の有病率は不明だが、児童期の ADHD の有病率は他国と大差ないと推定される研究もあることから (Kanbayashi et al., 1994)、本邦の成人期 ADHD も他国と同程度の有病率と予想される。つまり本邦においても治療的なニーズの高い精神障害の一つと言える。

成人期 ADHD を診断する際に問題になることとして、DSM-IV の ADHD の診断基準が児童を想定して作成されているため、診断基準を成人に応用するのが困難であるという点が挙げられる。また成人期 ADHD を診断する際に、児童期の症状をどう査定し、どの程度診断に組み入れるかの判断も困難である。現状では、成人期 ADHD の診断は DSM-IV に依拠しているとはいっても、実質的には各々が独自の基準で診断している状態であり、半構造化診断面接の作成はこの混乱を收拾に向かわせる一つの指標となりえる。また、本邦の研究者が半構造化面接を作成することで、海外の質問紙や半構造化面接を翻訳して導入する場合にしばしば問題となる、質問の日本語が不自然で我が国の状況に即していない、あるいは原著者から治験や研究のみの使用などの制限が設けられる、さらには高額の使用量を求められるなどの問題が解消される。

すでに 10 カ国で成人期 ADHD の疫学調査が行われているが (Fayyad et al., 2007)、本邦はこの面で立ち遅れていると言わざるをえない。成人期 ADHD の疫学調査には WHO の作成した Adult ADHD Self-Report Scale Symptom Checklist (以下 ASRS) が使用されることが多いが、信頼性・妥当性の確立した ASRS 日本語版はない。ASRS 日本語版の信頼性・妥当性の評価やカットオフスコアの設

定には診断の gold standard となるべき診断の枠組みが必要である。半構造化面接による診断を使用して ASRS 日本語版のスクリーニング・ツールとしての役割を担保するのも本研究の目的の一部である。

研究代表者は米国で児童・思春期の精神障害に対する半構造化診断面接 K-SADS と ASRS を使用して遺伝研究 (Elia, Takeda, et al, 2010) や臨床的研究 (Takeda et al. 2010; Elia, Takeda, et al, 2009) を行ってきた。また申請者らは広汎性発達障害に対する半構造化診断面接を作成しその信頼性と妥当性を確認している (Kurita, Koyama, et al. 2008)。これらの経験を活かして、本邦で使用される成人期 ADHD の半構造化診断面接を新に作成することで、成人期 ADHD の様々な研究への基盤を提供することができる。その一例として ASRS 日本語版のカットオフの設定が可能となり、本邦での ADHD のスクリーニングや疫学研究につながる。

2. 研究の目的

本邦初の成人期 ADHD の半構造化診断面接 (ASIA) を作成する意義は臨床面でも研究面でも大きいと考える。それぞれについて以下に述べる。

臨床面では

- ① 成人期 ADHD の診断の一つの標準的方法となる。
- ② ASRS 日本語版のカットオフが設定でき ADHD のスクリーニングが可能となる。

研究面では

- ① まず対象の ADHD 群の一様性が保たれるようになる。
- ② また妥当性・信頼性が確認された診断面接を使用することで、本邦の成人期 ADHD を対象とした研究が海外の雑誌からもアクセプトされやすくなる。
- ③ 海外の質問紙や診断面接を翻訳したときにしばしば生じる、質問が不自然な日本語である、あるいは日本の実情にあつて

いない、といったことがなくなる。

- ④ 半構造化診断面接ができることで ASRS 日本語版のカットオフを設定することができ、疫学研究への道が開ける。

以上のごとく、本研究は成人期 ADHD の臨床応用から研究までの基盤を提供する。

3. 研究の方法

1) 成人期 ADHD の半構造化診断面接 (ASIA) の作成

内外の成人期 ADHD の質問紙や臨床的に得られた知見をもとに、日本の成人の状況に即し、自然な日本語による、DSM-IV に準拠した成人期 ADHD の半構造化診断面接 (ASIA) を作成する。この際、来るべき DSM-V の内容にも対応できる内容とする。児童期の症状の有無の査定に関しては、K-SADS-PL や ADHD-RS-IV-J といったすでに信頼性・妥当性が確認されている尺度を利用する。成人期 ADHD や健常者にそれらを施行して、理解しにくい表現が無いか、実情に即していない質問がないか等の問題がないかチェックし、ASIA の項目に反映させる。

2) 研究参加者のリクルート

申請者がホームページを作成し研究への参加を呼びかける。研究参加者は成人期 ADHD とは限らないようにデザインする。また申請者らが関係をもっている成人期 ADHD の自助グループにも参加を依頼する場合もありうる。さらに成人期 ADHD (疑い含む) の研究参加者は 50 人以上を予定している。なお児童期の回想能力の関係で対象年齢は 18 歳から 48 歳とする。

3) 半構造化診断面接の施行

研究参加者には龍谷大学「大人とこどものクリニック」で申請者がブラインドで半構造化面接を使用して診断する。さらに研究参加者にはテスト・バッテリーとして WAIS-III (知能の評価)、ADHD-RS-IV-J や K-SADS-PL (児童期の ADHD ならびに併存症の評価)、広汎性発達障害評定システム PDDAS (広汎性発

達障害の評価)、MINI (その他の精神障害の評価)、ASRS 日本語版を施行してもらう。また診察はビデオテープで撮影する。養育者の参加が得られたケースでは、研究参加者の児童期の情報を聴取する。

平成 24 年度以降

1) 半構造化診断面接 (ASIA) の信頼性・妥当性の評価

申請者の施行した半構造化診断面接 (ASIA) のビデオを視聴して共同研究者の一人が評定し、評価者間信頼性を検討する。また診断についてブラインドの経験豊富な児童精神科医および心理士が、ASIA を除く全ての情報から診断することで併存妥当性の検討をする。さらにコンセンサス診断での ADHD 群と非 ADHD 群の得点差を検定することで判別妥当性を検討する。また成人期に ADHD の症状を満たし、児童期に ADHD であったことの客観的証拠が得られた群と得られなかった群を比較する。

2) ASRS 日本語版の健常群への施行

半構造化診断面接 (ASIA) の信頼性・妥当性が確認された後に、年齢、性別にばらつきがないように「健常群」の成人に ASRS 日本語版を施行する。リクルートは 500 名以上を予定している。

3) ASRS 日本語版の信頼性・妥当性の検討
数十名の研究参加者に再検査を依頼して再検査による信頼性を確認する。また数十名の研究参加者で、養育者にも回答できる項目を養育者に回答してもらい養育者評定と本人評定に統計的な差が無いことを確認する。半構造化診断面接 (ASIA) で成人期 ADHD と診断された群と非 ADHD 群で ASRS 日本語版の総得点や各項目の反応率を統計的に比較する。また内部一貫性の評価と確認的因子分析を行う。

4) ASRS 日本語版のカットオフの設定

以上の結果から ASRS 日本語版のカットオフ

を設定する。「健常群」でカットオフを上回っていたもので、あらかじめ追加の検査に同意していた人たちに半構造化診断面接 (ASIA) を施行して成人期 ADHD の診断の有無を評価する。健常群は community sample ではなく、いわゆる sample of convenience になると思われるので、正式な有病率は算出できないが、これにより成人期 ADHD の大まかな有病率も推定できる。

4. 研究成果

成人期の ADHD に関して内外の研究機関の訪問や学会への参加を通して情報を得た。また精神神経学会に於いてシンポジウム『成人期の ADHD における診断および治療上の課題』を企画した。ADHD をもつ成人から日常生活上の困難さや症状についての情報を収集して半構造化面接のプロトタイプを作成し、予備調査を経て本調査を施行した。同時に ASRS というスクリーニングのデータを収集した。その予備的な成果を児童青年期精神医学会などで発表している。同時に成人期の ADHD の単語記憶検査の特徴について神経心理学会で発表している。現在、DSM-5 にも対応した成人期の ADHD の半構造化面接と ASRS に関する論文の投稿準備中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

武田俊信、おとなの ADHD の心理学的評価、精神科治療学、28(2); 163-170, 2013

[学会発表] (計 8 件)

①金澤潤一郎、広野ゆい、武田俊信、松尾博史、自主シンポジウム「成人期の AD/HD に対する多角的支援と認知行動療法の位置づけ」、日本認知療法学会、2011 年

②武田俊信、中村和彦、根来秀樹、舘農幸恵、金澤潤一郎、田中康夫、シンポジウム「成人期の ADHD における診断および治療上の課題」、精神神経学会、2012 年

③武田俊信、辻由依、西田典子、松井三枝、成人期の ADHD における単語記憶学習能力

日本神経心理学会総会 2013 年

④武田俊信、辻由依、金澤潤一郎、栗田広、大学性における WFIRS-S のプロフィール、日本児童青年期精神医学会総会、2013 年

⑤武田俊信、辻由依、栗田広、成人期の ADHD のスクリーニング質問紙 (ASRS) 日本語版における大学生のプロフィール、日本児童青年期精神医学会総会、2013 年

⑥武田俊信、辻由依、上床輝久、栗田広、成人期の ADHD の半構造化診断面接の作成、日本児童青年期精神医学会総会、2013 年

⑦大西将史、染木史緒、武田俊信、中村和彦、Conners' Adult ADHD Rating Scale (CAARS) 日本語版の開発 (1)~CAARS 自己報告式の信頼性と妥当性の検討~、日本児童青年期精神医学会総会、2013 年

⑧望月直人、大西将史、武田俊信、中村和彦、Conners' Adult ADHD Rating Scale (CAARS) 日本語版の開発 (2)~CAARS 観察者評価式の信頼性と妥当性の検討~、日本児童青年期精神医学会総会、2013 年

[図書] (計 1 件)

Josephine Elia, Richard Kingsley, Toshinobu Takeda, Sibel Algon, Pharmacological treatment and prognosis of ADHD, Clinical management of attention deficit hyperactivity disorder, Future Medicine, 2013

[その他]

ホームページ等

http://www.let.ryukoku.ac.jp/~t-tak/01_index.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武田 俊信(TAKEDA, Toshinobu)
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：70596460

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：